

先軍政治とポスト金正日

鐸木昌之

(尚美学園大学)

1994年7月8日、「偉大な首領」金日成が死亡したことが発表された。それは、金日成時代の終わりとともに、文字通り金正日時代の開幕であった。それまで、金正日は、「父なる首領」金日成の指導と後援のもとで、1970年代初め以来、実質的に権力を掌握し、金正日体制を事実上確立してきた。しかし金正日がどんなに権力を掌握していたとしても、金日成という存在なしには金正日の指導はありえなかった。その時期は、金日成後の金正日時代への準備期間にほかならなかったからである。

金日成死後、金正日は、金日成の「偉業」と「遺訓」を受け継ぎながらも、金正日独自の政治指導、シンボル操作とイデオロギー形成、それらを支えるシステムの形成に乗り出した。それが現在、北朝鮮のいう先軍政治である。この先軍政治に関してはすでに多くの論考がでている⁽¹⁾。

そこで本稿では、北朝鮮がなぜ先軍政治が必要であると説明しているのかを中心に考察したみたい。北朝鮮が「先軍政治」に進んだ理由としてあげているのは、その第一は、金日成の死であり、第二は、米国が北朝鮮を政治的に孤立させ、経済封鎖をし、軍事的圧迫を加え、「改革」と「開放」の方向へ向かわせようとしたこと、第三に、ソ連・東欧社会主義崩壊の教訓であった。これらを検討することによって、先軍政治の特徴が浮き彫りになると考えられるからである。そのうえでポスト金正日問題を考えてみたい。

1. 金日成の死と先軍政治

先軍政治は、1995年1月1日、金正日が軍を現地視察に訪れたときから始まったとされている⁽²⁾。それに異議をはさむつもりはないが、1995

年1月以前に、興味深い金正日の演説がある。金正日は、1994年10月16日、金日成死後、百日喪に際して『偉大な首領様を永遠に高く奉り、首領様の偉業を最後まで完成しよう』と題する演説を党中央委員会責任活動家の前でした⁽³⁾。

金正日は、この演説で人民軍の強化と軍事を重視する社会的気風を作ることを強調した。また彼は、人民軍を強化するための重要な課題として、軍が党的軍隊として「いかなる逆境の中でも党的の偉業に忠実であり、わが党と生死運命をともにする革命的気風を徹底的に作り上げなければ」⁽⁴⁾ならないことを挙げた。後述するように、軍が金正日指導下の党から離れれば、軍は自らの体制に挑戦するものになりえるからであった。

それゆえ、彼は、「軍隊を掌握できない党は、威力を發揮することはできず、党的領導を受けることのできない軍隊は、力のある戦闘部隊になることはでき」⁽⁵⁾ないと党と軍の不可分を強調した。したがって「今日わが国では党こそ軍隊であり、軍隊こそ党である」⁽⁶⁾と結論付けた。この論理はその後の「先軍政治」論の原型にほかならない。

また、金日成死後の情況認識がこの「先軍政治」論に大きな影響を与えた。金正日は、北朝鮮が「世界反動の元凶である米帝と直接対峙して」おり、「まだ国の統一を成し遂げることができ」ないので、「米帝と反動は、わが共和国に対する侵略と戦争策動をさらに強化しています。このような条件でわれわれがぶつかるあらゆる難関と試練に打ち勝ちながら、社会主义偉業をしっかりと擁護固守し、力強く前進させようとすれば、決定的に党とともに人民軍隊を強化」⁽⁷⁾しなければならないと語った。しかし、北朝鮮が「米帝」と対峙し、「祖国統一」が完成されていないことは、それまでと変わりなかった。

それ以上に、金日成死後の北朝鮮が直面した「情況は、レーニン死後、スターリンが大権をつかんだ1920年代前半期の時代状況にも対比できないほど重大である。単独で帝国主義連合勢力と対抗するというまったく同じ対決構図下で、ソ連邦は、軍隊の役割を祖国守護に立てた反面、以北は、主体革命偉業全般に拡大しているところに、その他の社会主义政治と区別される」⁽⁸⁾と認識されていた。ロシア革命後、レーニンが死亡した直後、列強各国の干渉のもとで孤立したソ連と金日成死後の北朝鮮が対比された。レーニン死後のスターリンと金日成死後の金正日である。金正日は、レーニン死後のソ連以上に徹底した孤立感にさいなまれたのである。金正日から見れば、同盟国中国はもっとも信用できない相手であったに違いない。

したがって、金正日は、北朝鮮で「軍事を重視する社会的気風を作り、全人民が人民軍隊を愛し、積極的に援護させ、全民武装化と全国要塞化を徹底的に実現することでいかなる敵も襲いかかることができるなくし、わが国をハリネズミのように作」⁽⁹⁾る必要に迫られた。金正日が頼り得るものは、軍隊以外になかったのである。

金日成の死が先軍政治路線採用の直接の契機になったことは、前述したように、金日成百日喪に際して金正日が「党こそ軍隊であり、軍隊こそ党」という「先軍」概念を明確に演説していたことからも明らかである。

金正日は、金日成を、朝鮮史で最初の偉大な指導者、全世界が公認する人類の太陽、抗日革命闘争に勝利し、朝鮮を解放した指導者、朝鮮解放後における党と国家の建設、米帝との祖国解放戦争における勝利、自主路線で社会主义建設、そして主体思想の創始者として作り出した。事実関係は別として、結果的にそのカリスマ性は絶大なものになっていた。

皮肉にも、金正日は、自分が作り出した金日成像に縛られることになった。金正日以外の人々からみれば、金正日は常に金日成と比較されるからである。それ以上に、金正日自身がもっとそれを意識していた。金日成死亡直後に掲げられた「金日成同志は金正日同志」というスローガンは、

比較される金正日の心理状態を示している。

それがもっとも端的に示されているのは、白頭山天池の前に立つ金日成と金正日の画像である。背の高さが160センチ内外の金正日と180センチ近くの体格の立派な金日成が同じ背の高さと体格で描かれている。この画は金正日の決裁を経て公開されたことは間違いない。金正日には、父親金日成に対する劣等感があるのである。金正日は崔銀姬に自分を「体格は小さくて、太くて長いウンチみたいでしょ」⁽¹⁰⁾と語っていた。

したがって、金正目にとて、自分の時代は、金日成時代と比較して同等かそれ以上のものでなければならない。これが先軍政治を生み出す重要な理由になる。

金正日は、「先軍政治は、私の基本政治方式」であり「万能の保険」⁽¹¹⁾と語っていた。また北朝鮮人ではなく、韓国人が書いた形式をとった先軍政治を解説する書籍のなかで「先軍政治は、以北で主体革命偉業発展の新たな歴史的段階の要求と脱冷戦——デタント時代の始まりとともに、世界的版図で起こった進歩と反動勢力間の変化」の上で、「金正日将軍様が直接構想、提示遊ばれた革命的な政治方式」⁽¹²⁾と説明された。さらに、北朝鮮の学者は、「先軍政治は、祖国と民族の最大の利益と人民の運命に対して全面的に責任を持って率いてやり、保護してやる、人民に対する最大の愛と信頼を反映した、完成された政治」⁽¹³⁾と規定した。したがって、先軍政治は、「金正日将軍の尊称とだけ結びつけて呼ぶことできる偉大な金正日式政治方式」⁽¹⁴⁾として位置付けられた。

すなわち、そこには父親金日成の政治方式とは違うことが含意されている。これに関して前述の「韓国人」の著者は、金正日が「首領様の革命闘争史は、軍隊を先に創建し、それに依拠して革命と建設を勝利に導いてこられた先軍革命領導の歴史であるとおっしゃられながら、金日成主席の革命闘争史を先軍革命領導史」⁽¹⁵⁾と規定したと述べていた。再び歴史の書き換えが始められたのである。

金日成の政治は、ソビエト革命や中国革命に類似した、党指導下の労働者階級に主体をおいたものであった。それは、労働者階級の利益を実現し、

労働者階級に依拠し、社会主义の実現を目的とする政治方式という意味で「先労政治方式」と呼ばれた。また、この「先労政治方式下で労働者階級の党と軍隊との相互関係を調べてみれば、労働者階級の党が先に建設され、それに基づいて軍建設が行われるので、先党後軍建設方式」にはかならなかった。これは、ソビエト革命の方式をそのまま受け入れたものであった。これに対して、金正日の政治は「先党後軍ではなく、先軍後党の道が選択」⁽¹⁶⁾された。金日成も、朝鮮人民革命軍を先に創建し、1945年8月、解放後に党を創建し、その後、軍隊を正規軍に強化発展させたという。これも歴史的事実ではないが、新たな歴史の書き換えである。

マルクス・レーニン主義の階級闘争論や革命論に基づく「先党後軍」ではなく、「先軍後党」が何故選択されたのか。それは「過去の社会主义革命と社会主义建設の歴史的経験は、軍隊の優先的強化とその役割に関する問題の解決なしに人民大衆の自主偉業実現でいかなる成功も望むことができないという深刻な教訓を残した」⁽¹⁷⁾からであった。ソ連・東欧社会主义崩壊の教訓によって、金正日は先軍政治を選択したというのである。

したがって、「社会主义下では情勢が緊張し、革命が深化発展すればするほど、軍隊を政治の中心的位置にさらに確実にたて、その位相をさらに高く立てこそ、軍隊が自己の歴史的使命を円満に遂行」できると合理化された。しかし「従前」の社会主义理論から見れば、これが社会主义と呼べるのか疑問であるのも間違いない。

それでは、金正日が選択し、創始した先軍政治は、いつまで続くのか。それは、「ある一時的な段階での政治方式だけではない主体革命偉業完成の全歴史的時代を包括」⁽¹⁸⁾する。先軍政治は、過渡期としての一時的なものではなく、北朝鮮の主張する主体革命偉業が完成するときまで、少なくとも金正日が権力を掌握しているあいだは続くと主張していた。また先軍政治の範囲には韓国も含まれていた。

したがって、「先行社会主义政治方式との関係で見るとき、先軍政治は、金正日将軍が金日成主席の先軍革命領導を承継発展させ、社会主义政治

史で初めて生み出された社会主义政治方式」⁽¹⁹⁾と規定されるのである。金正日は、金日成政治を継承すると言いながらも、それを部分的に否定し、自らの独自性を主張した。金正日が権力を確立した金日成生存中は、金日成が絶対的であるがために、金正日でも金日成の教示を変えることは不可能であった。金日成死後、「遺訓政治」を掲げたにもかかわらず、金正日は、父親の政治を全面的に継承できないことを父親の生存中から理解していた⁽²⁰⁾。金正日は、父親を部分的に否定しなければ自らの時代を切り開けないことを知っていた。それだからこそ父親の百日喪を契機に「先軍政治」概念を言い始めたのである。

2. 「先軍政治」理論と哲学

先軍政治の内容はどのように説明されているのか。それは、第一に、軍事先行の政治であった。先軍政治は、「本質において軍事先行の原則で革命と建設で発生するすべての問題を解決していく、軍隊を革命の柱として掲げ、社会主义偉業全般を押し進めていく政治」であり、「軍隊の地位と役割の視角から考察するとき、軍隊を革命の主力軍として掲げ、主力軍としての軍隊の役割に基づいて革命と建設を前進させていく政治」⁽²¹⁾とされた。

また、核心である軍事先行は、「国防力強化に最優先の力を注ぐ政治」であり、「軍隊の強弱は、その政治思想的優越性の如何にあるだけでなく、武装装備の準備程度がどうかによって規定される。強力な武装装備は、すなわち現代的な武装装備の準備にある。先軍政治は、国防力を強化することに国家的投資を惜しまない」⁽²²⁾ことであった。したがって、先軍政治は、「軍隊の武装力準備をもっとも重要な国事としてみなす政治方式」⁽²³⁾であった。確かに国防力強化だけで見れば、それは金日成政治と変わりはない。

第二に、先軍政治は、軍隊に依拠する政治であった。それは、「軍を革命の主力軍、柱として掲げ、軍に依拠して革命を前進させる政治方式は、歴史に今まで存在したことがない独特の政治方式」であった。先軍政治以前の革命論では、軍隊は「単純に反革命を制圧するための役割と祖国保

衛と社会主义制度護衛任務を遂行するのが基本的使命」⁽²⁴⁾とされた。他方、先軍政治において軍隊の役割は、「軍事力を社会主义偉業の守護、前進を総体的に浮かび上がらせる梃子とする政治方式」であり、「戦争と平和問題を超越し、社会発展の全般領域に拡大」⁽²⁵⁾させた。別の言い方をすれば、「革命軍隊が革命的軍人精神、闘争気風、生活気風で模範を創造し、それを全社会に波及させ、軍隊と民衆が思想と闘争気風の一致を成し遂げ、この軍民渾然一体の威力で社会主义偉業を完成する」⁽²⁶⁾ことであった。軍隊が主体になって社会主義革命偉業を完成すると説明されるのである。

この軍の役割は、「従前」の社会主义理論でいえば、前衛党の役割にはかならない。したがって、金正日が言う通り、軍は党であることになる。さらに極端に論理が進められ、「軍隊はすなわち党であることは、軍隊の創建とその目的と使命、その政治的性格において党と軍隊のすべてのものが一つに一致する」⁽²⁷⁾と強弁される。それゆえ、「先軍政治がすべての事業で軍事を先行させて、軍事力に依拠して革命を前進させる政治であるといって、すなわち軍隊だけを掲げる政治と考えるのは間違いである。軍隊は、すなわち党であり、国家であり、人民であるために、軍事力の第一次的強化はすなわち党を強化し、国家を強化し、民衆の利益を徹底的に擁護すること」⁽²⁸⁾であった。

では、何故、労働者階級などの社会組織や集団ではなく、人民軍隊に依拠できると説明されのか。第一に、人民軍隊が「政治思想的準備と革命性で核心的部隊」だからであった。首領と党に対する忠実性、革命偉業に対する献身性は「人民軍隊の本質的優越性」であるとされた。第二に、人民軍隊は、「この世でもっとも規律があり、戦闘的な革命力量」だからであった。第三に、「党と首領の命令指示貫徹で人民軍隊が發揮している絶対性、無条件性の精神と高い創造力と実践力はなにものとも比較できない威力」⁽²⁹⁾だからであった。それだからこそ、先軍政治は、「首領決死護衛軍としての人民軍隊の精銳化された面貌、精神力を核心的要塞として社会主义偉業遂行の主体的力量強化で新たに提起される問題を解決」⁽³⁰⁾する政治方式になる。

先軍政治の要諦は、人民軍が金正日に対して無限の忠誠を誓っていることにある。先軍政治は、「朝鮮人民軍を金正日護衛軍として作ることからはじめられた政治方式」⁽³¹⁾なのであった。なぜなら「われわれ式社会主义を圧殺しようとする帝国主義者たちの攻撃の矢は、革命の首脳部に向けられている。現在、革命の首脳部保衛は社会主义の生命線を守るためにもっとも重大で、尖鋭な闘争となっている」⁽³²⁾からであった。

軍隊の首領への忠誠こそが米国の圧迫政策に対して打ち勝つことができるるのである。「米国の経済封鎖、軍事的圧殺策動によって今までなかった食糧難、エネルギー不足で経済全般が被害を受けるようになったとき、軍隊がそのような分野を引き受け、直面した問題を解決することによって、経済の全般分野で活性化、正常回復の道を開いたのはそのような先軍政治の結果」⁽³³⁾であると評価された。先軍政治こそが米国の圧迫の結果起きた「苦難の行軍」を克服した理由とされた。

このような「先軍政治」理論の背後には、軍事力に対する金正日の独特的「哲学」が存在した。それは金正日の「銃隊哲学」と呼ばれるものである。1995年6月、金正日は、人民軍指揮員に「私はいつでも銃と息をともにしています。この世ですべてのものが皆変わっても、銃だけは自分の主人に背反しません。銃は革命家の永遠な道連れであり、同志であることができます。これがすなわち銃に対する私の持論であり、銃観です」⁽³⁴⁾と語っていた。この「哲学」は、「銃の地位を生死運命をともにする革命同志の位相に置き、正義の銃隊のうえに社会主义の運命、国と民族の尊嚴があるという特有の使命感を付与」⁽³⁵⁾したと評価された。

しかし、この「哲学」に世の中の変化によって自分を裏切るかもしれない人間よりも、銃を信用するという金正日のシニカルな思考と自分の周囲に対する猜疑心を垣間見ることができる。金正日は、バンド員達が金正日万歳を叫ぶのを「あれはみんなウソですよ。ウソでやってるんですよ」と見抜いて申相玉に語っていた⁽³⁶⁾。金正日は、自分の周囲の人々を信頼できず、徹底的に孤独なのである。最高権力者としてのそれとともに、彼生

來の孤独感が北朝鮮の孤立に投影していると見ても間違いない。これは北朝鮮の特異な対外行動様式や国際関係や国際政治観にも反映しているようである。

3. ソ連・東欧崩壊の教訓

注目されるのは、ソ連・東欧社会主义崩壊の教訓に関して「ソ連邦が世界的な軍事強国としての軍事力を持っていたにも、社会主义か、資本主義かという峻厳な時期に銃声一発も撃てず、社会主义を守ることができなかつたのは、軍事を政治と完全に分離させ、軍隊を非政治化された集団に作った現代社会民主主義者達の『改革』、『改編』政策の結果であり、さらに社会主义偉業遂行で軍事問題を正しく解決できなかつたことと関連する」⁽³⁷⁾と評価していることである。

さらに、少し長くなるが、そのまま引用してみたい。旧ソ連では、「1980年代中頃に台頭した現代社会民主主義者は、社会主义社会建設を放棄し、資本主義の道に進みながら、その出発点を執権党的の領導的権能を弱化させ、軍隊を非政治化、無思想化することから始めた。1986年2月、第27次大会で「新思考」、「運命共同体論」、「国際社会の非思想化」を骨子とする綱領を採択した旧ソ連の現代社会民主主義者は、いわゆる人民と人類のためという名のもとに帝国主義と妥協し、党的の領導権を放棄し、軍隊に対する政治思想的指導を拒否した。現代社会民主主義者は、1990年7月、第28次党大会を契機に党的の領導的役割を自ら放棄し、これを奇貨として軍隊内の党组织、政治組織を解散した。かれらは、立法機関内での「政治」を主張しながら、領導的政治組織である党と一般社会团体の同伴者関係を主張して、労働者階級の党的革命と建設に対する領導的機能をなくしてしまった。かれらは、1990年3月、第3次ソ連人民代議員非常大会で大統領制を導入し、ソ連憲法第六条である「党は社会の指導的および嚮導的力量である」という文句を削除してしまった。こうして執権党は事实上無色の集団になり、それにしたがって党的偉業、人民の保衛者として軍隊も自らの務めをなすことができなくなつた」⁽³⁸⁾と

いう。

党的「無色化」とは軍隊の「無色化」であった。とくに、ソ連では「非政治化、非思想化を骨子とするゴルバチョフチームの軍『改革』、『改編』政策によって陸海空軍総政治局をなくし、党组织を解散することで党的軍隊であることをやめ、それが禍の発端になって社会主义的性格を失つたのはもちろん、共産党解体、ソビエト政権の崩壊、資本主義復帰にいたつた」⁽³⁹⁾と結論付けた。

また、1991年1月、「軍事政治機関に関する総則を批准することに関する」という大統領令の発表によって「軍総政治局が大統領直属行政機構に所属職能を変更させたことを吐露した。そして総政治局が軍隊内の党组织と政治事業を指導する党政治指導機関から軍人の文化娯楽を組織し、政治軍事ニュースを知らせる一般文化行政機構に移転されたのである。ゴルバチョフは、大統領職権で赤軍陸海空軍総政治局をなくし、軍隊内の3万7千余の党组织を解散させ、それで赤軍は社会主义革命軍としての存在を終えた」⁽⁴⁰⁾と評価した。

軍は党的軍隊ではなく、國軍でなければならぬという軍の「非政治化」の主張は、「軍隊破壊、社会主义崩壊をねらった反社会主义策動」であり、「改革」、「改編」のスローガンを掲げて、「軍隊の非政治化、非思想化政治路線を選んだのは、政治的無知ではなく、社会主义崩壊を目的とした反動的行為」⁽⁴¹⁾にすぎなかつたという。

ソ連で軍が社会主义の崩壊を見守るだけで、何もしなかった理由として、軍隊を革命の主力軍の位置に置かなかつたこと、軍隊の強化と役割を社会主义政治の基本をなす根本問題とする思想を生み出すことができなかつたこと、社会主义が勝利するためには名実ともに軍隊が首領の軍隊になつていなかつたこと⁽⁴²⁾が指摘された。先軍政治とは、当然、これらを満足したものになる。しかし問題は、これらを満足すれば、社会主义体制の崩壊を阻止できるのかである。

そのため、軍の無色化、非政治化を阻止することが最大の教訓になる。「軍隊は、政治で中立を守らなければならないという軍隊の非政治化、非思想化を根本的に否定し、軍隊は党的軍隊、首領の軍隊、民衆の軍隊にならなければならない」⁽⁴³⁾

と強調された。1990年代半ばから北朝鮮が軍総政治局と軍保衛司令部を重視し、その改編と強化に取り組み始めたのは、上記の理由がある。そのため、米国や日本や韓国だけでなく中国までもが北朝鮮に改革開放を迫る政策は、それが人民に経済的繁栄をもたらすことよりも、軍の非政治化とさらには軍の首領に対する忠誠の瓦解を招き寄せてみるとみているに違いない。改革開放によって、体制の根幹である軍への思想浸透をもっとも恐れている。

その恐怖感は明確に示されている。「軍隊が党の領導を拒否し、非政治化、非思想化されるならば、その位置に資本主義思想の毒素、ブルジョア生活様式が席を占め、宗教意識が根をはやすなど非社会主義的、非プロレタリア的病菌に汚染され、軍隊は烏合の衆になってしまう」⁽⁴⁴⁾というのである。烏合の衆になった軍隊は、首領の軍になり得なず、金正日に刃を向けるかもしれない。それゆえ、北朝鮮で軍事力強化の目的は、「首腦部保衛にあり、全民が銃隊を片手に力強くつかんでいることも首領護衛にある。われわれには首領護衛を離れた銃隊というのはありえない」⁽⁴⁵⁾と断言される。反対に、首領を離れた軍隊、首領を護衛できない軍隊にいつでもなりうるのである。さらに軍への恐怖感は人民に対する恐怖感につながっていくのは間違いない。

この背後には、東欧の崩壊のなかで起きた独裁者の末路、とくにルーマニアのチャウシェスク大統領の最期が金正日の頭にこびりついているであろう。それゆえ、全世界に衝撃を与えたチャウシェスク夫妻の銃殺の映像は朝鮮人民軍には絶対に見せなかつた。

おわりに——ポスト金正日

先軍政治は、金日成政治の部分否定、金日成死後の徹底した国際的孤立感と父親金日成に対する金正日の劣等感とその裏返しとしての同等意識、自分以外のものに対する徹底した不信感とシニズム、それと裏腹の孤独感、そして軍と人民に対する恐怖感の産物ともいえる。金日成が相対的に制度や組織に依存したこと比較して、金正日時代

は、はるかに指導者のパーソナリティを反映した政治システム、政治体制なのである。党は軍であるという言葉を借りれば、「北朝鮮は金正日であり、金正日は北朝鮮である」と考えた方がいいかも知れない。それゆえ、金正日なき先軍政治の継続は困難である。

金正日は、軍に対して自分への絶対的忠誠を搖るぎないものにするために軍内での学習、別の言い方をすれば、洗脳と情報遮断と監視に粗漏がない限り自らの体制を守ることができると考えている。その核心部分が軍総政治局と軍内党组织と軍保衛司令部にはかならない。それこそが党が軍であり、軍が党なのである。金正日の金日成への劣等感から考えると、金日成の死を契機に先軍政治を掲げたのは、軍は、金日成には忠誠を誓うが、金正日に忠誠を誓うかに関して彼自身が疑問を持っていたこともあるかもしれない。また、彼の劣等感は、金日成ができなかったこと、例えば、核実験やミサイル実験や対米交渉なども現れないとみても間違いないであろう。「父なる首領」以上のものとして金正日の存在を国内外に示せるからである。

他方、人民の学習はある程度機能しなくともかまわないと見ているのかもしれない。しかし軍社会は一般社会を反映する。社会の矛盾は軍社会にそのまま投影されるのである。北朝鮮のような徴兵制をとり、しかも兵役期間が長く、人民のなかで軍人の割合が高いところではとくにその傾向は甚だしいといえる。

先軍政治のもとでは「改革」「改編」あるいは「開放」をとることはない。金正日は、「社会主义の運命に死活がかかる過酷な情況のなかで人民軍隊を固く信じ、軍事力に依拠して、軌道変更である「改革」、「改編」の道ではなく、社会主义擁護固守、主体革命偉業完成という革命の道を屈せずお歩みに」⁽⁴⁶⁾なった。「改革」「開放」をとらせる政策は、首領を守ることができないようにすることにあるととらえられる。あるとすれば、改革開放という名称を使わない部分的なそれである。人民がどれだけ餓死しようとも、軍に対する統制と監視がはるかに重大なのである。

ポスト金正日、後継は可能であろうか。権力の

結節点に位置する「親愛なる指導者」が予知不可能な事態が生じて欠如したとき、すべての組織機関は、有機的つながりを失い、分解する。組織や機関を横断したつながりや人的ネットワークは、首領の指導を乱すものとして認められなかつからである。その事態を防ぐためには、金正日が占めている「首領」の位置に誰かを置かなければならない。

金正日登場のときには、金日成というカリスマの存在、後継体制の組織化と制度化、パルチザングループの支持と反対者の肅清、人民に対するイデオロギー教化と学習と神話の創造、食糧配給制と成分社会と人民班システム、複数機関による複雑で、錯綜した、徹底した監視網の存在と整然とした報告体系、「自立的」な社会主義経済体制、そして金正日後継に同意は示さなかったものの、社会主義諸国の存在という国際環境があった。

しかし、1990年代半ば以降、首領制を支えた、社会主義計画経済は瓦解し、部分的かつ原始的な「市場」経済が成立し、私的所有が部分的に復活し、無私は消えて個人の欲望が復活し、食糧とエネルギーは外部に依存し、配給システムと成分社会と人民班システムも瓦解し、相対的に金正日にカリスマが欠如し、学習機能が低下した結果、イデオロギー教育が不可能な状態になり、軍以外で党組織が機能不全に陥り、党・国家・軍幹部の不正腐敗が横行し、インフレの結果、格差が極端に拡大し、脱北者やラジオや携帯電話を通じて国外情報が人民の間に流入し、完璧に近かつた監視網に穴が開き始めている⁽⁴⁷⁾。

金日成とともに抗日闘争を戦った、同志であり、部下であったパルチザングループは、権力闘争のなかで裏切りや反対はあったにせよ、金正日にはない。抗日時代からの同志的関係を持った金日成とは異なり、パルチザングループの子供たちと金正日は利害関係でしか結びついてない。さらにその子息たちではその傾向はいっそう強くなるであろう。金正日の子息たちが権力の継承に成功したとしても、それが継続できるか否かは、権力の正統性と権威の確立にかかっている。暴力だけでは長続きできない。学習機能の瓦解によってイデオロギー再生産が不可能であり、「市場」経済の成

立と餓死の継続、そして外部情報の流入によって人民の意識は革命的变化が起きている。人民は、思想ではなく、利害と怨念で動き始めている。したがって、金正日後継のときと違い、権力継承のためのイデオロギーと神話を人民のなかに浸透させるのは困難な状態である。また、巷間で話題になる集団指導体制は一時的に成立するかもしれないが、中長期的に可能であろうか。北朝鮮では、日本の朝鮮総督府とソ連軍政による支配、そして金日成と金正日という独裁の経験しかないからである。

金正日の言葉が北朝鮮の現状と将来を的確に指摘しているのでそのまま引用したい。

「最近各国で社会主義が挫折したのも階級教育をせず、階級闘争を放棄したことと関連して」⁽⁴⁸⁾いる。

「私的所有とそこから生まれる個人主義に基づいた社会は必ず社会を敵対した階級に分裂させ、階級的対立と社会的不平等をもたらし、人民大衆に対する少数支配階級の搾取と圧迫を同伴する」。

「金で人を動かそうすることは社会主義の本質に背馳し、そのような方法では社会主義の優越性を発揚させることはできない。金で人々を動かす資本主義的方法に依拠するようになれば、人々の革命的熱意と創造的積極性を高めることができないだけでなく、社会主義制度自体を変質させ、危険に陥れる結果をもたらす」。

「幹部が力をふるって、官僚的姿勢をとり、不正腐敗をこととすれば、社会主義執権党は大衆の支持と信頼を失い、大衆の支持を受けることのできない党は自らの存在を維持できない。歴史的教訓が示すように、社会主義執権党が幹部のなかで力を振ることと、官僚主義、不正腐敗を許容することは自ら墓を掘る」⁽⁴⁹⁾。

金正日の的確な指摘のように、彼が持っている人民と軍に対する恐怖感が現実化したときは、人民の怨念が体制の崩壊に向かって火をふくかもしれない。

韓国による時期尚早な統一は、民族主義感情の満足にはなるかもしれないが、統一された朝鮮半島社会に混乱と分断と格差など多くの複雑で、解決困難な問題をもたらす。冷静な議論や多くの異

論の存在を期待できにくい韓国社会やマスコミの現状を見るとき、統一社会の統合のために「反感情、すなわち反日、反米、反中などの極端な噴出と「事大」への傾斜という朝鮮半島で繰り返される歴史が再現するのであろうか。

- (1) 例えば、岩本卓也「体制危機への北朝鮮の対応——内政的文脈から」および磯崎敦仁「金正日先軍政治の本質」(小此木政夫編『危機の朝鮮半島』慶應義塾大学出版会、2006) 参照。
- (2) 例えば、김봉호『위대한 선군시대』(キムボンホ『偉大な先軍時代』平壌、平壌出版社、2004年) 6頁参照。
- (3) 김정일『위대한 수령님을 영원히 높이 모시고 수령님의 위업을 끝까지 완성하자』(金正日『偉大な首領様を永遠に高く奉り、首領様の偉業を最後まで完成しよう』平壌、朝鮮労働党出版社、1997年6月)として単行本で出版され、『김정일선집』(『金正日選集』第13巻 平壌、朝鮮労働党出版社、1998年1月25日)に収録公開された。
- (4) 김정일前掲論文、25-26頁。
- (5) 김정일前掲論文、27頁。
- (6) 김정일前掲論文、27-28頁。
- (7) 김정일前掲論文、26頁。
- (8) 김철우『김정일장군의 선군정치』(キムチョルウ『金正日將軍の先軍政治』平壌、平壌出版社、2000年9月30日) 40頁。
- (9) 김정일前掲論文、28頁。
- (10) 崔銀姬・申相玉『闇からの脅——北朝鮮の内幕』上巻(文春文庫、1989年) 39頁。
- (11) 「우리당의 선군정치는 필승불패이다」『로동신문』(「わが軍の先軍政治は必勝不敗である」『労働新聞』) 1999年6月16日。
- (12) 김철우前掲13頁。
- (13) 김룡진「당과 군대는 인민의 운명이며 생명」『조선로동당창건 55돐기념론문집』(キムリヨンジン「党と軍隊は人民の運命であり、生命」『朝鮮労働党創建五周年記念哲学論文集』平壌、科学百科事典総合出版社、2000年7月15日) 99頁。
- (14) 김철우前掲38頁。
- (15) 김철우前掲22頁。
- (16) 김철우前掲20-21頁。
- (17) 김철우前掲29頁。
- (18) 김철우前掲23頁。
- (19) 김철우前掲20頁。
- (20) 申相玉・崔銀姬前掲下巻では映画に関する金日成の

教示を否定したい理由で二人を拉致して映画を作らせたと語っている。94頁参照。

- (21) 김철우前掲27頁。
- (22) 김철우前掲36頁。
- (23) 김철우前掲97頁。
- (24) 김철우前掲38頁。
- (25) 김철우前掲39頁、41頁。
- (26) 김철우前掲40頁。
- (27) 김철우前掲49頁。
- (28) 김철우前掲56頁。
- (29) 김철우前掲41-42頁。
- (30) 김철우前掲31頁。
- (31) 김철우前掲35頁。
- (32) 승재순·로영『인민군대의 총창우에 사회주의의 승리가 있다』『로동신문』(ソンジェスン・ロヨン「人民軍隊の銃槍のうえに社会主義の勝利がある」『労働新聞』) 1997年4月7日。
- (33) 김철우前掲43頁。
- (34) 김철우前掲57頁。
- (35) 김철우前掲60-61頁。
- (36) 崔銀姬・申相玉前掲下巻、71頁。
- (37) 김철우前掲3頁。
- (38) 김룡진前掲114頁。
- (39) 김철우前掲50頁。
- (40) 김철우前掲32-33頁。
- (41) 김철우前掲32-33頁。
- (42) 김철우前掲11-12頁参照。
- (43) 김철우前掲33頁。
- (44) 김철우前掲50頁。
- (45) 승재순·로영前掲。
- (46) 김철우前掲17頁。
- (47) 抽稿「北朝鮮の内部で今、何が起きているのか」(財団法人防衛弘済会『日本の風——明日を考える防衛情報誌』第2号、2005年6月25日夏号) 18-21頁、および抽稿「権利の貧困——朝鮮民主主義人民共和国の人権と食糧危機」解説(アムネスティ・インターナショナル著(アムネスティ・インターナショナル日本訳)『権利の貧困——朝鮮民主主義人民共和国の人権と食糧危機』(現代人文社、2004年12月)) 86-93頁参照。
- (48) 「위대한 수령님의 뜻을 받아들여 내나라, 내조국을 더욱 부강하게 하자」『김정일선집』(「偉大な首領様の意志を奉り、我が国、我が祖国をさらに富強にしよう」『金正日選集』第13巻平壌、朝鮮労働党出版社、1998年) 494頁。
- (49) 「사회주의는 과학이다」『김정일선집』(「社会主義は科学である」『金正日選集』第13巻平壌、朝鮮労働党出版社、1998年) 457頁、478頁、484頁。